その日の帰り道、瀕死の触手と出会った。

俺はバイトの夜シフト帰りで疲れきっていた。あんまり疲れすぎてコンビニ弁当をチンしてもらうのも忘れた。不覚。独り暮らし中の安アパートに帰ってもYouTubeの犬猫動画を見て寝る位しかやることがない。

俺は動物が好きだ。しかし家の都合で飼えず、いたいけな小学生の時分にはからあげと名付けたトイプードルを散歩する友達を見送り、寂しい思いをしてきたのだ。

故に大人になったら絶対犬か猫を飼おうと誓っていたのだが、予算や立地条件が折り合い付かず、大学生になった現在もペット禁止のアパートで暮らしている。

さらばからあげ、フォーエバーからあげ。

関係あるようでないが、さっき立ち寄ったコンビニで買ったのもからあげ弁当だった。賞味期限ギリギリで30％引き、ちょっとお得。こんなささやかなことで嬉しくなれるんだからなんて安上がりでめでたい人間なんだろうとあきれてしまった。

「アホくさいこと考えてねーでとっとと帰ろ」

街灯が等間隔に光る夜道を歩いていると川沿いにでた。川、といっても都会のドブ川だ。両岸と底面はコンクリートで固められ、ちょろちょろと濁った水が流れている。アパートは橋を渡ってすぐそこだ。

大学に行く時はママチャリの後ろに幼児をのっけた主婦やセーラー服の女子高生とすれ違うが、さすがに夜10時すぎると誰もいない。近くのマンションからテレビの音声がかすかに漏れてくるだけだ。

橋の上のアスファルトにはチョークで大小不規則な円が落書きされていた。近所の子どものしわざだろうか。

そういや随分ケンケンパをしてないな、と思い当たる。これでも小学生の頃はケンケンパの達人で売っていたのだ、俺の数少ない取り柄である。小学校低学年まで遡らなきゃ自慢できることがないのかよ、というまっとうなツッコミはおいといて。

「よし」

今だけは童心に戻ることを自分に許す。

くたびれたスニーカーで地面を蹴り、チョークでしるされた○から○へ飛び移る。

「けん・けん」

ぶにゅり、靴裏に嫌な感触がした。何だ？　路上に目をこらし仰天する。

「ぱあっ!?」

白い円の中で巨大ミミズ……触手がのたくっていた。てらてらしたピンクの体表は粘膜っぽくて、生理的嫌悪をかきたてる。勢い余って尻餅を付いた。

「なんだこれＵＭＡか⁉　しゃ、写真写真」

反射的にスマホを掲げ、連続でフラッシュを焚く。シャッター音にあわせ触手が伸び縮みする。ＳＮＳに投稿したらバズるかも。いや、匿名掲示板に投下するか？

様々な考えが脳裏を駆け巡るも、優先すべきは安否確認だ。

「生きてる……よな」

靴の先でおっかなびっくり突付いてみる。触手が蠢く。何だこれ、状況がまったくわからん。そもそも触手って道端に落ちてるもんなのか、交番に届けるのが正解なのか。最近の飼い犬飼い猫は迷子防止対策でマイクロチップが埋め込まれてるらしいが、コイツは野良触手なのか？

全長50センチほど、横幅は5センチ程度。ミミズと違って節はなく、表面はのっぺりなめらかだ。まず思い浮かべたのはムーミンに登場するニョロニョロ、アレをピンク色にしたら大分近くなる。

さてどうしたものか。無視して行くか。おもいっきり踏んでしまったのが少々後ろめたい。

「ええと……大丈夫？　身とかでてない？」

孔の有無もわかんねえけど。

何話しかけてんだ俺の馬鹿。後悔すれども遅し、顔から火がでる。触手は相変わらず地面を這っていた。なんだか元気がない。踏んだせいかと思ったが……

戯れに手のひらをさしだすと体を擦り付けてきた。温かい。犬猫と同じ親愛表現……なのか？　うっかりほだされて袋をあさり、弁当のふたを開ける。

「ほら」

からあげを一個、手掴みして投げる。直後に触手が跳びはね、上部に切り込みが入る。そこが口らしい。からあげを上手に咥えて嚥下、お辞儀するみたいに伏せをした。

「おおー……」

控えめな拍手をする。途中で我に返り、もしや肉食かと警戒して距離をとる。しかし触手は無反応だ。どうやら人間には興味がないらしい。

路上に伸びている触手を眺めてるうちに不思議と親しみが湧いてきた。ぱっと見グロテスクだが、案外人懐っこい。試しにしゃがんで聞いてみた。

「うちくる？」

触手は頷いた、ように見えた。

俺は死にぞこないの触手を連れ帰り、バスタブで飼うことにした。今住んでるアパートは犬猫全面禁止だが、触手ならきっとセーフだ。吠えないし。

もともとシャワーしか使ってないんで浴槽は空いている。最初は弱っていた触手だが、三日もたてば元気を取り戻した。手をさしのべるとてのひらにすりすりしてきて可愛い。

「ただいまー」

安アパートの階段を上がり、玄関ドアに鍵をさしこみ回す。片手には見切り品のからあげ弁当。左手の扉を開けてユニットバスを覗くと、浴槽の縁に触手がひっかかっていた。

「お待たせ、腹減った？　今やるから急かすなよ」

からあげを一個投げる。喜び勇んで食い付く触手にむかい、他愛ない悪戯心で言い聞かせる。

「うまいか？　それな、トイプードルっていうんだ。トイプー弁当。覚えとけよ」

触手は脇目もふらずトイプードルを食べていた。浴槽の縁に掛けてスマホを取り出し、「触手UMA　研究所　脱走」などの文字列で検索をかける。相変わらずヒットなしで、落胆と安堵が綯い交ぜになった溜息を吐く。

「やっぱ野良触手で確定か。マッドサイエンティストの遺伝子操作の産物……とかじゃねえよな」

ブツブツ独り言をもらす。もちろん触手に聞いても答えない。毎日からあげを与えてるせいか、心なしか肌艶が良くなってきた。表面のテカリが美しい。

「ん？」

画面をスワイプしていた手が止まる。斜め読みしていたネットニュースの見出しがひっかかったのだ。数日前、俺が住む市内の山に隕石が落ちたらしい。

「らしい」なんて曖昧な表現を使ったのは、落下軌道の目撃者はいても、肝心の隕石そのものが見当たらなかったから。インタビューに答えた地元民も不思議がっていた。

興味をそそられて市内の噂を集めた掲示板を覗いてみると、墜落したＵＦＯ説をはじめ、まことしやかな都市伝説や陰謀論が書き込まれてて笑っちまった。

触手を拾ってから一週間がたった。今じゃ自力で浴槽を這い出し、俺が留守の間に部屋中探検している。頑張ればツチノコに見えないこともない。結局触手の写真はネットに上げなかった。やらせだの偽物だの叩かれたらやだなあと日和ったのだ。

それにまあ、俺だけの秘密って感じで独り占めすんのも悪くない。謎の生き物を匿ってる特別感がある。

「ただいまー」

今日も今日とて一日の講義を終え、玄関ドアを開けて靴を脱ぐ。

浴室のドアに隙間ができていた。触手が出入りした痕跡だ。壁のスイッチを押して電気を点ける。触手は窓辺にいた。中途半端に引かれたカーテンをめくり、窓の外の暗闇を凝

視している。
「やべっ！」
慌ててすっとんでってカーテンを閉める。ご近所さんに見られたら触手を飼ってることがばれる、最悪通報案件だ。
「部屋を移動するのはいいけどカーテン開けるな、騒ぎになるだろ。通行人がショックでぶっ倒れちゃうじゃん」
片膝付いて言って聞かせりゃ触手がしゅんとする。人の言葉わかってんのか？　熱心に何を見ていたのか気になり、そっとカーテンの端をめくる。
窓の向こうにはドブ川、さらに向こうには鉄塔が建った山がそびえていた。
「……しょうがねえなあ」
ご主人様がいない間触手は暇を持て余す。風景を眺めて気晴らししたくなっても責められない。
頭をかいてぼやけば、ごめんなさいをするようにすり寄ってきた。触手のぬくもりに癒され、苦笑いでなで返す。
「よしよし」
触手の体表はすべらかだ。
二週間が経過した。新たな発見があった。触手は実に器用なのだ。部屋の明かりのスイッチは身の丈が足りず届かないが、テレビの電源なら点けられる。俺が寝転がってスマホを見てると、肩越しに興味津々覗き込んでくる。好きなバンドのＭＶを流してる時なんてリズムに合わせて体を振っていた。
「ヘドバンうま。ウェイ系か」
音楽に合わせ頭を上下させるパリピ触手と俺。楽しいひとときと。
触手は知的好奇心旺盛で色んな動画を見たがった。もふもふした犬猫がじゃれてる動画や赤ん坊が這い這いしてる動画、時事ニュースや科学知識、歴史の解説系もジャンルにこだわらず見まくっていた。
俺が早々に飽きて窓を閉じようとすりゃ、先端で手の甲を突付いて抗議を申し立てる。
「こんなむずいのツマンねーじゃん、Ｈな動画見ようぜ」
触手に指図されるのが癪で、わざと催促に背いた。スマホに再生されたエロ動画では、全裸のＡＶ女優が派手に喘いでいる。触手は食い入るように液晶の痴態を見詰めている……てかコイツの目ってどこよ？
Ｈな動画を鑑賞してたらむらむらしてきた。股間に血流が集中するのを感じる。右手を下着に突っ込み、膨らみ始めた性器をまさぐる。
「んッ……」
スマホを見ながらマスをかく。左手で性器を持ち、右手でしごく。唇を噛んで快感を追い求め、カウパーで濡れた手

を巻き付け、繰り返しこすり上げる。
「ッは、ンく」
高まる喘ぎに興奮し、布団に突っ伏して小刻みに吐息をもらす。
触手は肩にのっかったまま、興味深そうに飼い主の自慰を観察していた。一瞬萎えかけたが、触手に見られたからなんだっていうんだと破れかぶれに開き直る。
「ぁあッ……」
カウパーにぬる付くペニスを一際強く擦った直後、不規則な痙攣が襲って射精に至る。指に絡み付く白濁を見下ろし、急速に火照りが冷めていく。いわゆる賢者タイム到来だ。
枕元のティッシュをとって後始末をする間も、触手はずっと肩に張り付いていた。少々決まりが悪い。
「男ならフツーだろ。ヌかねーとたまるんだよ」
俺の言い訳を聞いてるのかいないのか、触手がちょこんと首を傾げる。
俺は外に出れず退屈している触手に好きな動画を見せ、好きな音楽を聞かせ、好きな本を読ませた。触手は懐っこくて可愛い。休みの日は俺のそばを離れず、トイレにも這って付いてこようとする。
「しっしっ！　放尿シーン見せる趣味はねェの、シッダウン！」
手の甲で追い立てりゃ不満そうにダンシングし、すぽっと浴槽に飛び込む。……考えてみりゃ風呂がコイツの巣か。
どっちかっていうと俺がテリトリーを侵してるのか。
触手を観察してわかったこと。好物はからあげ。排泄孔は存在しない。性格は物怖じせず好奇心旺盛。俺になでられるのが好きみたいだ。機嫌が良いと手のひらにすりよってくる。
「お前どこから来たの？」
戯れに聞いてみた。返事ははなから期待してない。案の定触手は伸び縮みしただけ。質問を変える。
「オス？　メス？　雌雄同体？」
そもそも性別の概念があるのか疑問だ。案の定触手はきょとんとしている。ある時ふと思い立ち、YouTubeの動画をお手本に簡単な芸を仕込んでみた。
「お手」
胡坐をかいて片手をだす。触手が先端でちょんと手のひらを突く。鼻セレブの落下傘めいたソフトタッチ。
「ちんちん」
成功に気を良くして少し難易度を上げてみる。触手が一瞬戸惑って固まるも、上半身（？）をうーんと伸ばす。
うちの触手は賢い。三歳児程度の知能はあるんじゃないか？